

浅川泰宏報告と西海賢二報告によせて

原 淳一郎

浅川報告では、日本宗教学会の学会誌ならびに大会での口頭報告において、巡礼研究がここ数年増加しているという指摘がなされた。このことをどのように捉えていったほうが良いのだろうか。単純に言えば、研究の進展ということになるのだろう。

欧米においては、巡礼研究がさらに高まりを見せている。かつてはターナーの巡礼論(『儀礼の過程』(1969年)・『象徴と社会』(1971年))のような象徴人類学的なアプローチを試みる研究者が多かった。すなわち巡礼者自身の行動・思想・体験を把握しようとするものである。しかしながら、現在ではエルスナーらの編著による“VOYAGES & VISIONS”(1999年)に見られるように、巡礼があることによっていかなる影響がもたらされたか、に焦点が当てられ始めているようである。具体的には、旅行者の紀行文によるある地域へのステレオタイプの認識の形成、旅行者の移動による地域変容、などである。

では果たして日本ではどうか。研究の高まりを社会の写し鏡として捉えれば、巡礼研究の高まりの背景には巡礼の高まりと言えなくもない動向がある。まず急速に高まっているパワースポットブームである。生涯学習という側面もあり、マスコミの煽りもあるだろうが、山ガールと言い、宗教的なものが脚光を浴びている。だがそれだけではない。各地域での取り組みや、広域な地域活性化のなかで生み出されているものもある。代表的なものに世界遺産、国指定史跡、重要伝統的建造物群保存地区のほか、近年これまたブームと

なっている日本百名城がある。その多くは観光客を呼び寄せることで地域を活性化させようという側面と、こうした活動に取り組むなかで、その地域内部の連携を高め、団結力を増そうとする側面があるだろう。

筆者の関係で言えば、山形県置賜地方では2012年に置賜三十三観音巡礼の本尊一斉開帳がおこなわれた。置賜三十三観音巡礼は伝承こそあるが、その開始時期や歴史はほとんど解明されていない。また近年では巡礼そのものをおこなう人もほとんどいない状態であった。しかしながら、置賜巡礼の実践者、いくつかの札所の住職、赤湯温泉の旅館などが手を取り合い、復興させようという取り組みがあり、開帳に至った。今後巡礼者が復活するのかは不明であり、いくつかの札所は無住であって巡礼者の納経や朱印に即座に対応できないという難しさもある。この置賜三十三観音巡礼の取り組みは、盛んにおこなわれている最上三十三観音巡礼や庄内三十三観音巡礼の影響を少なからず受けているだろう。

さらにこの置賜三十三観音巡礼の影響を受けて起きている動きもある。かつては盛んにおこなわれていた会津三十三観音巡礼である。筆者は会津地方をフィールドの一つとしており、近世から近代にかけての寺社参詣の実態を探っているが、男性が伊勢参宮、飯豊山、古峰原(古峰神社)、金華山などへ出かけるのに対して、女性は岩角寺(現本宮市)や会津三十三観音巡礼に盛んに出かけていることが地方文書から判明している。ところが、現在会津三十三観音巡礼は全くといって

良いほど廃れてしまっている。これに対して福島県立博物館の学芸員を中心として調査研究をおこない、展示をし、復興させようという試みがなされている。

巡礼もこうした地域活性化としての取り組みとしても脚光を浴びるというきわめて実践的な要因も含んでいるのだ。巡礼研究はまさしくシンポジウムのタイトル「旅・観光・歴史遺産」を象徴するものであると言える。

日本独自の文化であり、信仰習俗である「巡礼」は教育の世界にも取り入れられている。例えば、四国の複数の大学では単位として「四国遍路」がカリキュラムに入っている。巡礼を単位とすることの是非は別として、それぞれの地域を見直す機会として、じっくり当該地域を見て回ることになる「巡礼」が教育の現場に取り入れられることは良いことだろう。

あるいは「巡礼」という言葉に執着すれば、かつて田中智彦が「巡礼と順礼」という興味深い報告をされている。西国巡礼と坂東順礼において、「順礼」と「巡礼」という言葉の使用方法に歴史的変遷がうかがわれるとした注目すべき指摘である。田中は文献史料と各札所に残された納札の分析を通じて、当初「巡礼」の表記が一般的であったが15世紀半ば頃より「順礼」の表記が現れ始め、15世紀末頃から「巡礼」を上回っていくと指摘された。すなわち15世紀末になって札所の順番が固定され意識されるようになっていたということである。こうした用語にこだわる研究も今後必要なものであろう。

と言うのも、そもそも「巡礼」という用語自体、Pilgrimにあてられた訳語であり、西洋の「巡礼」と日本の「巡礼」は違うものである。違うというのは、西洋の巡礼は聖地へ赴くことを指しているが、日本の巡礼は、巡る場所すべてが等価であり、それらが一つの意味づけがなされている。たとえば四国遍路は弘法大師の聖蹟をたどるものであり、坂東

巡礼や西国巡礼は観世音菩薩をめぐる旅であるように、である。すなわちこうした点からみれば、西洋の「巡礼」とは日本の「参詣」に近いものである。

現在日本の三十三観音巡礼は輸出されて、台湾や韓国にも三十三観音巡礼が作られている。またアニメやゲームで舞台となった場所を訪れる現象を「聖地巡礼」と呼ばれるようになってもいる。本来信仰行為であった「巡礼」概念が拡大しつつあるなか、「宗教」とは何か、「信仰」とは何か、根元的なことが問われていると言えよう。エーリッヒ・フロムのように何かに向けて一生懸命生きている姿は宗教的であるという概念規定やニーチェの超人といったヒューマニズム的宗教との差異はどこにあるのか、あるいは現代のドーキンスとヒッチンスと、テリーイーグルトンらの論争を見てもわかるように、すぐに無神論へ直結する一神教世界にはない、日本的「巡礼」をめぐる研究・議論は一石を投げられるぐらいの存在となるはずである。等価値な複数の聖地をめぐる行為の研究成果が地理学からもさらに盛んに届けられることを祈念したい。

次に西海報告であるが、西海報告は若者の通過儀礼としての山岳登拝と考えられる富士参詣の事例を紹介したものである。若者の通過儀礼としての山岳登拝は、全国的に存在したことが分かっており、岩木山、鳥海山、月山、筑波山、富士山、木曾御嶽山、白山、石鎚山、伯耆大山、英彦山など山岳信仰があればこれに付随しない例はないと言った方が良い習俗である。これだけ全国に成立した習俗であるため、修験道の影響を想定せざるを得ないが、実はいかにして生まれたものであるか今ひとつ判然としない。

現今通過儀礼研究はきわめて盛んである。しかしながら問題点があるように思われる。一つ目は、出産、結婚、葬儀などに集中しすぎているように思われることである。アルノ

ルト・ファン・ヘネップの『通過儀礼』やホカートの『王権』など初期の通過儀礼研究は無論上記のテーマも範疇に置いていたけれども、中心は成人への通過儀礼、王権の譲渡・継承の構造解明にあったはずである。新城常三、桜井徳太郎らによって、全国的にこうした習俗があることが紹介され、全国各地の自治体史において聞き取りがなされているにもかかわらず、ほとんど体系的な研究がなされてこなかった。これには、文献史料にほとんど残されていないことも関わっているだろう。長年農村文書の調査をおこなってきているが、明確に若者の通過儀礼として山に登るということを示す記述がある文書はほとんど目にしたことがない。したがって、これまで

社会学的観点から、聞き取り調査を基にしながら村落内構造の解明の一環として若者組や青年会などが取り上げられ、その又一環としてイニシエーションが取り上げられることが多かったのはやむを得ないだろう。またそのためある程度近代初頭ぐらいまでは辿れるにしても、それ以前の状況、あるいはその始原を明らかにすることは困難であった。筆者は現在新潟・福島・山形の三県が接するところに位置する飯豊山と湯殿山をフィールドにして通過儀礼としての山岳登拝を調査分析しているが、年代のはっきりする西海報告のような事例がこれからも多く紹介されることを祈念したい。

(山形県立米沢女子短期大学)